

地域から発する可能表現の3区分化

～大分県方言の可能表現についての一考察～

別府大学短期大学部講師 松田美香

I. はじめに

大分県方言の可能表現は、いわゆる共通語に比べるとやや複雑な様相を呈している。可能表現がおおむね2区分される九州方言の中でも珍しく、大分県下では3区分されることが研究の結果明らかにされている。まず、本稿ではこれまでの大分県方言における可能表現3区分の研究を整理する。

さらに、九州域や全国の可能表現についての研究報告と照らし合わせることによって、本県の可能表現の構造を説明する適当な図式が見出せないことを確認する。さらに、筆者が作成した本県の可能表現の構造図式を提示し、実際の調査結果によって検証する。

II. 目的

全国的に珍しいとされる、大分県方言の可能表現3区分についての研究史をまとめ、3区分の成立過程と意味構造について考察する。この作業によって、大分県における県外からの影響を県内でいかに消化（処理）しているのかを明らかにし、大分県という地域を考える一助にしたい。

III. 先行研究

(1) 大分県内の可能表現研究

以下に、大分県内での可能表現の研究史をまとめる。

可能表現とは、「～することができる」「～することができない」という可能・不可能を表す形式を言う。いわゆる共通語では助動詞「レル・ラレル」を動詞に下接するか可能動詞（読める、書ける、眠れる…をA型可能動詞、見れる、着れる、食べれる…をB型可能動詞と呼ぶ）を用いることによって表すことになっているが、各地域でさまざまな形式が報告されている。また、九州では多くの地域で、「能力可能」と「状況可能」の2区分が行われている。

能力可能（不可能）： その動作主体にそうするだけの能力が備わっている（いない）ので、そうすることができる（できない）

例 英語ヲ知ランカラ 英語ノ本ヲ 読ミキラン

状況可能（不可能）：（その動作主体にそうするだけの能力は十分あるのだが、）その力を発揮するだけの条件がそろっている（いない）ので、そうすることができる（できない）

例 ココワ 暗イカラ ココデワ 本ワ読マレン¹⁾

大分県の可能表現についての報告は、まず、『九州方言の基礎的研究』²⁾ (1969・風間書房)におけるものがある。この調査においては、「能力可能」と「状況可能」の2区分しか設定されておらず、作図もされていない。まだ3区分についての報告がなかったということであろう。以下に、大分県内全22地点の回答語形を表にして示す。

質問文 能力可能

「盃一杯ぐらいの酒なら、私だって飲むことができる。」というときの「飲むことができる」を、どのように言いますか。(表1)

表1 能力可能

能力可能の語形	老年層	少年層
ノミキル	21	20
ノムル	10	7
ノメル	1	1
ノメルル	9	6
ノムコトガデクル	1	0
ヨーノム	0	1
上記のうち		
ノミキル単独	7	12
ノメルル単独	0	0
ノムル単独	0	0
ノメルルとノミキル	4	1
ノムルとノミキル	3	3
ノメルル、ノミキル、ノムル	6	3

※少年層 ヨーノム1 (南海部郡鶴見町) 『九州方言の基礎的研究』から作表(表2も)

表1を見ると、能力可能の形式として「～キル」が定着しつつあり、「キル」よりも「ノメルル」や「ノムル」の方が古い語形ということがわかる。

質問文 状況可能

「こんなやかましい処では、本など読めない。」というときの、「読めない」を、どのように言いますか。(表2)

表2は否定形であって、完全に条件が同じとは言えないが、圧倒的に「ヨマレン」の使用数が多く、ここでもヨメレンが衰退傾向にあることがわかる。また、状況可能においては、「ヨマレン」に迫る「ヨメン」の姿が見出せる。この2語形の併用が少年層で増加していることから、状況可能においては「ヨメン」が新しく興隆のきざしを見せ、「ヨマレン」はそれに追われている状態であるということが読み取れる。

¹⁾ 定義と例文は日高(1991)「九州方言の可能表現」『大分県史 方言篇』(246~247p)を参照。

²⁾ 九州方言研究会(1969)風間書房『九州方言の基礎的研究』

表2 状況可能

状況可能の語形(否定)	老年層	少年層
ヨマレン	20	19
ヨメン	9	13
ヨメレン	8	3
上記のうち		
ヨマレン単独	7	9
ヨメン単独	2	3
ヨメレン単独	2	0
ヨマレンとヨメン	4	7
ヨマレンとヨメンとヨメレン	5	3

上述の内容は大分県内の各地域を捨象して、大分県全体の傾向のみをとらえたものである。大分県全体の傾向をとらえた上で、形式差のみに注目すると、可能表現が「～キル」という形式、「ヨメル」「ノムル(ノメル)」という可能動詞形式、「～レン」という形式に分けられる。「～レン」形式は上接する動詞の形に2種類あり、「読まー」「飲まー」と、「読めー」「飲めー」という違いがある。「ノマレン」という形は出てこないし、「ヨマレン」も状況可能にしか出てこない。しかし、「ヨメレン」「ノメルル(大分ではノメレルの古い形)」は出てくる。

ここで整理をすれば、「キル」は能力可能専用、「ヨマレン」などの形(いわゆる未然形+レン)は状況可能専用で使われていると言えるだろう。そして、可能動詞形式と「ヨメレン」「ノメレン」などの形(これを以降「可能動詞+レン」形と呼ぶ)は、能力可能にも状況可能にも使用されることがわかる。さらに、「可能動詞+レン」形は、能力・状況のどちらからも衰退傾向が見られ、可能動詞形は能力可能では併用語形として生き延び、また状況可能では新興勢力として力を伸ばしている傾向が見えるのである。

筆者は、「可能動詞+レン」という形式に興味を持ち、また、可能表現全体の意味と形式の複雑な関係にも疑問を持った。

そこで、大分県の可能表現についてまとめられた研究を調べてみると、まず種・糸井(1977)³⁾で、可能表現の「全国に類例の無い珍しい現象」が発見・研究されていた。大分県大野郡三重町において、「食べキル」「食べラルル(ラレル)」「食べルル(レル)」の3つの可能表現形式があり、それぞれ意味上の相違があるという、可能表現3区分の発見であった。

もともと可能表現の意味は厳然と区分され得ないものであるから、すっきりとは分かれなかったものの、この調査で3区分の傾向ははっきりと出たと行ってよい。その結果、次のABCの3区分が成立することが検証された。

³⁾ 種・糸井(1977)「大野川流域における可能表現」大分大学教育学部『大野川～自然・社会・教育～』

「A なんらかの、客観的に認定され得る原因・理由などが条件になった可能・不可能を言うもので、それだけ客観性のある確たる述べ方(—ラルル、—ラレル系)」

「B 自己の主観性の強い判断を基調とする可能・不可能で、従って、恒久的にある事態に対して使用されるのではなく、多くは、臨時に生ずる性質のものに対して用いる述べ方(—ラルル、—ラレル系)」

「C その人の本質的能力を基調として判断する可能・不可能を言う述べ方(—キル系)」

AとCが区別されるのは九州では珍しいことではなかったが、Bの意味とその形式が他と区別されるという報告は、まさに全国に類を見ない貴重なものであった。これが2区分から3区分へと向かっているのか、あるいは逆に3区分から2区分へ収束の途中なのかを明らかにすることが、今後の課題とされている。

これを受けて発表されたのが、日高・種(1981)⁴⁾である。大分県日田郡中津江村生え抜き⁵⁾の老・中・少年層それぞれ1名への面接調査と、津江中学3年生25人へのアンケート調査を実施・分析した。種・糸井(1977)同様、形式のバリエーション、意味と形式の2つの調査項目を使って調査している。論文では、まず糸井・種(1977)で付けた可能表現のネーミング・区分の変更を行っている。Aを「客観状況可能」とし、Bを「主観状況可能」として「状況可能」の下位区分に位置付け、Cは「能力可能」と名付けた。(図1)

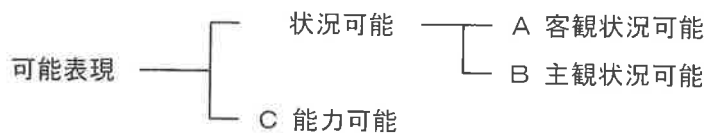


図1 日高・種(1981)における可能表現の区分

ここで、それぞれの意味を担う形式を正解として、語形を求め正解率を出したところ、やはり3区分は確かにあるという結論を導き出した。問題となるのはBの「主観状況可能」だが、ここで該当する質問についての調査結果を記す。

日高・種(1981)における主観状況可能の質問に対する回答

「食べる」…「食べレン」13人⁶⁾、「食べレレン」6人

「出る」…「出レン」0人、「出レレン」14人、「出ラレン」2人

「見る」…「見レン」1人、「見レレン」14人、「見ラレン」2人、「見キラン」2人

「行く」…「行ケン」0人、「行ケレン」9人、「行キキラン」3人、「行カレン」1人

⁴⁾日高・種(1981)「大分県津江地方の可能表現」『大分大学教育学部研究紀要』大分県津江地域特集

⁵⁾少なくとも片方の親も当該地に居住しており、本人は生誕時から他所で過ごすこと無く当該地に居住している人を「生え抜き話者」と呼ぶ。

⁶⁾2つの質問に回答した人数の合計。以下同様。なお、質問文は回答を得やすい否定文に統一されている。

以上の調査結果からも、「主観状況可能」の形式として「(動詞の)連用形+レン(レン)」が導き出せる。可能動詞について、形式のみを尋ねる質問には多くの回答がありながら、次の意味と形式に関する質問の回答では極端に少なく、代わりに「食べレン」「出レン」「乗レン」「見レン」「行ケレン」という回答が多数を占めることから、次のようなことが考察されている。

「主観状況可能」の形式は以前は可能動詞であった。しかし、その後それに「ルル(レル)」という二段(一段)に活用する助動詞を一律に接続することによって、更に安定した語形を志向する姿と見なすべきであろう。 日高・種(1981)

実際、話者が「乗レン」「行ケン」の語形は「古い」と回答しているとある。この回答から、中央からもたらされた可能動詞形は、そのままでは定着せず、以前から使用されていた助動詞「ルル・ラルル」を一律に添加して定着しようとしていると解釈された。

これらの調査結果を受けた日高(1983)⁷⁾は、大分県の国東半島に位置する町村の老・少年層に対する面接調査の結果を報告した。この調査では可能の否定(不可能)形で質問文を揃え、「そのほうが話者が各可能の形を意識しやすく、調査に便利である」としている。また、「～レン」あるいは「可能動詞形」が、他の質問項目の回答としても出現しており、話者の質問項目の解釈によって、選ばれる形式に個人差が生じることが述べられている。実際の語形としては「食べレン」「出レン」「見レン」「行ケン」「行ケレン」が出た。また、「能力可能」は「～キラン」、「客観状況可能」は「～(ラ)レン」を使う傾向もはっきり出ている。この調査の結果、国東半島の各地域でも、可能表現に3つの形式とそれぞれに3つの(可能の)意味を使い分けようとする傾向が見られたわけである。また、この調査では、話者が発した3形式のそれぞれ意味の違いを説明させていて、これまでに抽出された意味の区分を裏付け・補強する回答を得ている。

これら大分県内3地点の結果を踏まえて、日高(1991)⁸⁾では、大分県方言で可能表現におおむね3つの意味区分(図2)が認められ、状況可能がさらに2区分(下位区分)される点が特徴的であることが述べられている。

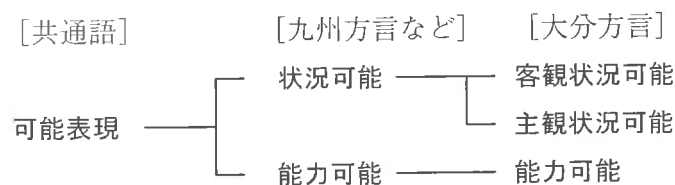


図2 日高(1991)における可能表現の区分

その他、地図集として「大分県豊後水道域方言地図集」も出されたが、解釈等は施されていない。この地図集については後述する。

⁷⁾ 日高(1983)「大分県国東半島の可能表現」

⁸⁾ 前出。日高(1991)「九州方言の可能表現」『大分県史 方言篇』(246～247p)

残された課題としては、この3区分の成立と展開、それに伴う3区分の意味構造の解明が考えられる。

(2) 九州地方の可能表現研究

時間的に少し溯って、神部宏泰(1987)⁹⁾では九州全体を視野に入れ、そこから各形式の歴史や特徴を見ようとしている。

可能態は、「能力可能」(一定の動作が、その動作主体の能力に基づいて、成就実現すること)と「状況可能」(一定の動作が、その動作主体の立つ、客観的状況に支えられて、成就実現すること)とが、異なった叙法によって表される地域が多い。(『九州方言の基礎的研究』から)

さらに、

種・日高(1981)は、「主観状況可能」として、一項を立てている。すなわち、可能表現に、「客観状況可能」「主観状況可能」「能力可能」の三態を認めようとしている。これはたしかに有効な区分と考えられる。

として大分県の3区分を認めている。さらに、「状況可能」を表す形式が九州各地で「ルル・ラルル(レル・ラレル)」という1形式で安定しているのに対し、「能力可能」は「強調的な心意に支えられて」変化を繰り返し、常に新形式を求め、また「主観状況可能」を担うものは、かつては「能力可能」であって使い古された末、衰退せんとしている形式であることを、広く九州一円の能力可能表現形式の分布や例文から証明しようとしている。

この論がさらに発展されている神部(1992)¹⁰⁾では、九州一円の可能表現について考察されている。

大分方言に見られる「主観状況可能」は、主として、その、いわゆる衰退形式(もとの能力可能であった形式。筆者注)によって担われていると言ってよいように思う。(中略)この地域(大分県下。筆者注)での「能力可能」形式は、既述のとおり、新来の「～キル」である。ところで、この形式が一般化したことにより、衰微したのが、「可能動詞」および「可能動詞+ルル(レル)」である。大分県下における、この形式と上述の不可能形式「エ(ヨ)ー～ン」との、史的関連については、微妙で、にわかには推断を許さないが、ともあれ隣接の大分豊後域で、「～ルル(ラルル)」関係の形式が、「能力可能」を分担していた史的事実は、ここに参照してよいものと思われる。

これに合わせて参照されるのが、中国北部域および四国南部域での状況である。(国語研究所<1979>37 図参照)。この地域でもまた、「能力可能」の肯定形式——可能法として、例えば「着レル」「着レレル」「着ラレル」など、「～レル(ラルル)」関係の形式が存立している。ほぼ全域に分布する「ヨー～ン」に対応して、周辺部に、残存的に分布するもので、肯定形式の「ヨー～」「ケッコ～」が生成する以前のものかと考えられる。

上記2論文によって、形式の変遷がかなりはっきりと捉えられる。「ヨー～ン」とは「ヨ

⁹⁾ 神部宏泰(1987)「九州方言の可能表現法—その存立と特性—」『兵庫教育大学研究紀要』7

¹⁰⁾ 神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院(第6章第1節「九州方言における可能表現～形式の隆替と表現特性～」)

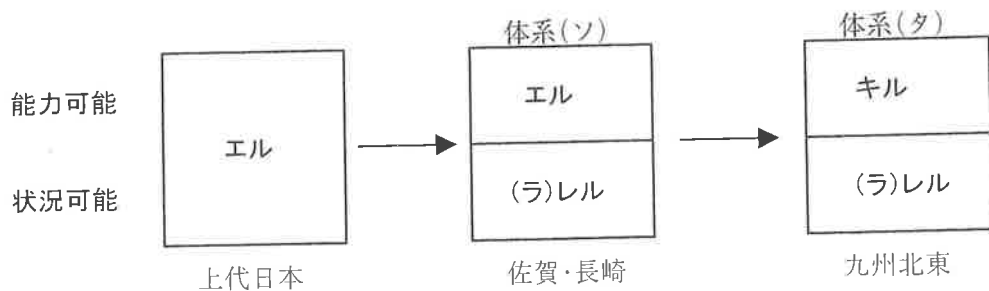
ーイワン」(言うことができない)などの形式である。これが大分県南部にも分布するため、史的変遷については簡単には推断することができないものの、全国的な分布を見ると「ヨー〜ン」よりも「レル(ラレル)」のほうが古いと言えそうだという見解である。さらに、大分県地域の可能表現における「状況可能」は、「レル(ラレル)」という助動詞を動詞に下接する形式のまま、ある程度長い期間安定している。しかし「能力可能」はその意味内容として強調や心情を含むために、不断に新形式を求め、栄枯盛衰が激しく、その結果、使い古された元能力可能形式は、主観状況可能の形式として何とか生き延びているという説明である。その能力可能形式とは、「可能動詞形」あるいは「可能動詞+レル(ルル)」形であったと推定される。

当時の大分県方言の可能表現は、もともとは助動詞「レル(ルル)」形式が可能表現全般を担っていたのかもしれないが、とにかく「能力可能」形式として「可能動詞形」あるいは「可能動詞+レル(ルル)」形が使用された時期があり、それが新興の能力可能形式「〜キル」に押されて、「主観状況可能」という意味枠を担当することになったと考えられるわけである。

(3) 全国の可能表現研究

そこで、全国的な視点も必要となる。渋谷勝己(1993)¹¹⁾は、過去(通時的)と現在(共時的)の可能表現を全国的な視点から捉えたものである。当該論文では、「可能表現の変遷過程」(図24-1/231p 本稿では掲載しない)によって、全国の可能表現の史的変遷と現在の分布を系統図化している。それによると、上代は、能力可能・状況可能の区別無く補助動詞「エル(得る)」と副詞「エ」によって表されていた。中古以降に自発を表す形式「(ラ)レル」の可能表現化があり、その結果、「エル」は「能力可能」を担当し、「(ラ)レル」は「状況可能」を担当するという2区分化が生じ、この体系が佐賀県や長崎県に現在まで残っているようである。次に、九州の北東地域では、「能力可能」を新興の補助動詞「キル」が担当するようになり、「状況可能」はそのまま「(ラ)レル」が担当していると

図3 渋谷(1993)における九州北東部の可能表現より(一部改変)



¹¹⁾ 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊

他の地域で注目されるのは、中部地方静岡県の「書ケール」と「書ケレル」である。この「書ケレル」は、今問題となっている大分県下の主観状況可能と同形であり、成立の仕方も通じるところがある。渋谷(1993)によれば、静岡県地域では明治以前頃までに「能力可能」は補助動詞「エル」が担い、「状況可能」を補助動詞「エル」から「レル」が担っていた。そこへ「状況可能」は可能動詞(ただし一段動詞には「ラレル」が下接していたが、やがてこれも可能動詞化する)に取って代わられたため、「能力可能」が補助動詞「エル」に、「状況可能」が可能動詞になった(現在の長野県地域)。特に静岡県地域などでは、「エル」が下接する時、連母音の融合を起こして「書ケール：能力可能」のようになったため、可能動詞「書ケル：状況可能」と発音の区別をよりはっきりさせる必要が生じ(長音の有る無しだけでは、区別がはっきりしない)、可能動詞に「レル」を下接した「書ケレル：状況可能」を生み出したわけである。渋谷(1993)ではさらに、以下の記述がされている。

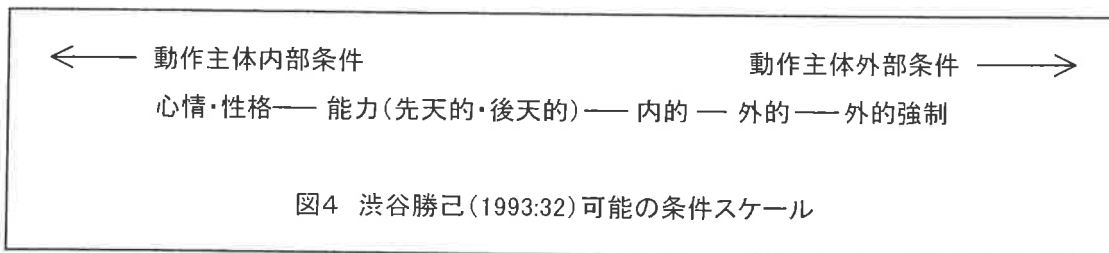
なお、静岡県新居町(山口 1985:809-10)では、体系(タ)から(ソ)に変化(回帰)しているようである。(§ 23.4.1.)。文法的な点で問題はあるものの、標準語の補助動詞「エル」と可能動詞が形態的な影響を与えているのかもしれない。

参照指示のある§ 23.4.1には、書ケレレル、着レレレルなどの形式も兵庫や高知で報告されているという記述がある。このような形式が使用される理由として、「可能形式にはラ行音、特に「レ」音が特徴的であるというような認識が根底にはあるのかもしれない」としながらも、「詳しいメカニズムは不明」としている。

可能動詞+レルという形式が全国的に散見できるという事実を知ってもなお、大分においては、なぜ「主観状況可能」と呼ばれる1つの意味枠を持ちえたのかという疑問が残る。

IV. 大分県の可能表現3区分化

(1) 渋谷説と神部説について



渋谷(1993:32)では、上記の「可能の条件スケール」を設定している。(図4) このスケールでは、左端が「動作主体の力や判断が及ぶところ」の極となり、まず動作主体と密着した心情・性格可能を置き、次に能力可能、さらに内的条件可能(図では内的)とし、さらに右は外的条件可能(図では外的)として、外的要因が動作の実現を左右する

のであって動作主体の力や判断が及ばないと説明する。そして、右端を外制強制条件¹²⁾とした。ここでは「主観状況可能」を「内的条件可能」と名付けている。渋谷(1993)に従えば、大分県方言の「可能動詞+レン」はスケールのほぼ中央に位置する内的条件可能を分節したことになるのだが、まだ十分には検証されていない。渋谷(1993:41)の[補注]において、大分県出身者2人の調査を行ったことが記されている。

一方行ケレン(下線は筆者)は、内的条件可能(動作主体の一時的な条件による不可能を表す)のうち、「今は(めんどうだから)したくない」といった心情的な理由による不可能を表す場合に用いられる。その心情的な意味からして、三人称主語をとることはできない。

この疲れているときに、買い物なんかめんどうくさくて行ケレン

* 太郎は疲れているから、買い物なんかめんどうくさくて行ケレン

としている。心情・能力を表す形式として「キラン」は定めたものの、内的条件可能の結果にも心情を伴うという報告がなされたことになる。そこで、「内的条件可能と外的条件可能については、改めて吟味することが必要になるかもしれない」と記している。

この調査報告で問題なのは、図4のスケールで「能力」をはさんで配置した「心情」と「内的」が非常に近い要素を持つことが確認されたということである。また、このスケールでは大分県方言において、なぜ「内的(主観状況可能)」が分節するのかが読み取れないことも問題であろう。

渋谷(1993:231)の変遷過程図においても、大分県における3区分化については省略されていて、これ以上は論じられていない。現在のところ、大分県の3区分が本当に唯一かどうかはまだはっきりしていないが、これまで大分県方言の研究で形式差は明確にされ、それに伴う意味差も多少はあることが報告されてきた。この3区分化を説明するスケール(構造図式)が望まれてしかるべきである。

さて、また神部(1992)については渋谷(1993)でも引用・批判されているが、この「可能動詞+レル」や内部条件可能(主観状況可能)について考えるとき、次の記述が問題になる。以下、神部(1992:309)から引用する。

新形式に押されて衰退する旧形式は、社会性が薄れて、機能が一方的に局限に限定され、内向性を帯びるようになることが少なくない。いわば、話し手中心の、主情性の強い表現を仕立てるのである。例えば、当、天草方言で一例をあげれば、文末詞「パイ」(「好か パイ。」など)の新生によって席を譲り、衰退した旧来の「ワイ」がある。この「ワイ」は(中略)話し手の詠嘆演出、感情表出に特色を示している。このように、衰退形式は、主情性の強い局限的な表現特性を示すことが多い。引用が長くなるが、この仮説が天草方言の可能表現「ユル」にも敷衍されている。

さて、天草の「～ユル(否定形はエン)」もまた、上述のとおり、何ほどかの衰退傾向にあり、その表現性も、局限的主情性を帯びることがある。(中略。下線は筆者による)

¹²⁾ 渋谷(1993:28)において、外的強制条件とは「あの山を見るといつも故郷のことが思い出される」の「思い出される」のような、「その外部条件が動作主体の意志の介入を全く許さないかたちで働く場合」であり、「自発」と呼んでもよいとある。しかし、「可能表現と連続した意味を表すために取り上げた。」

ベンジョノ キタナカデ イカ エン

(便所がきたないから、とても行く気になれない。アクセント記号省略)

ハノ イトーシテ ウタヤー エン モン (歯が痛くて歌えないもの。)

イマー ヨオー ナッテ イヤー エン (今は体が弱って車に乗れない。)

上記の神部説は説得力を持つものである。先に引用した神部(1992:310)で主観状況可能が承認されていたのは、実は上記の文脈を受けて承認されたのである。以下に、前述の引用の後部を載せる。

このような区分(「客観状況可能」「主観状況可能」「能力可能」;筆者注)を容認したうえで、改めて確認しておきたいのは、「主観状況可能(渋谷の分類では内的条件可能;筆者注)」である。天草方言での討究を例にすると、その形式は、かつて「能力可能」を支えていたものである。換言すれば、かつて「能力可能」を支えていた形式が、推移して、「主観状況可能」を表すようになっているのである。この推移を、衰退の方向で把握しようとするのが、本項の立場である。

「主情性」とは動作主の心情であり、渋谷(1993)でも取り上げられている「心情可能」に当たると思われる。しかし、繰り返しになるが、ここで取り上げられている「主観状況可能」の例は、渋谷では「心情(動作主体の心情・性格条件)可能」と「内的条件可能」に分けられ、「能力可能」の両側に配置された不連続なものになる。「便所が汚いから」は渋谷説では「心情」であろう。渋谷(2001:2)¹³⁾でも、可能の条件として、「恥ずかしいから行けない」は「心情」に分類されている。また、「歯が痛いから」「今は体が弱っているから」は、渋谷(2001)の「今日は気分が悪くて行けない」と同じ「内的」としていいだろう。このように、両者とも3区分を認めながらも、意味分類においては完全に一致しているわけではない。

さて、ここまでを整理すると、渋谷(1993)および(2001)では、大分県で分節されている「可能動詞+レン」の意味枠を内的条件可能とし、「可能表現のスケール」内の能力可能と外的条件可能の間に配置したものの、未だ十分ではないとしている。神部(1992)では、「主情性の強い局限的な表現特性を示す」例として、「衰退傾向にある表現形式」という観点から捉えようとしている。両説を包括した新たな仮説が必要である。

(2) 「大分豊後水道域方言地図集」

日高(1990)¹⁴⁾では、大分県中部～南部～東部に渡る県の約3分の1になる地域の、60歳以上の男女を話者にした方言地図を作成している。その中で「潤香(うるか)は大嫌いだから食べることができない」の質問(調査票では能力可能)に対して、全域でもっとも多い回答が「クイキラン・タベキラン」の「キラン」である。また、東南部(宮崎県と隣接)にまとまって「ヨー(エー)クワン・ヨー(エー)タベン」の分布がある。「クエレン」

¹³⁾ 渋谷勝己(2001.01)「可能表現調査票試案」(九州方言研究会発表レジュメ)

¹⁴⁾ 日高貢一郎(1990.03)「大分豊後水道域方言地図集(昭和60～63年調査)」大分大学教育学部国語科研究室 地図 No. 285～299

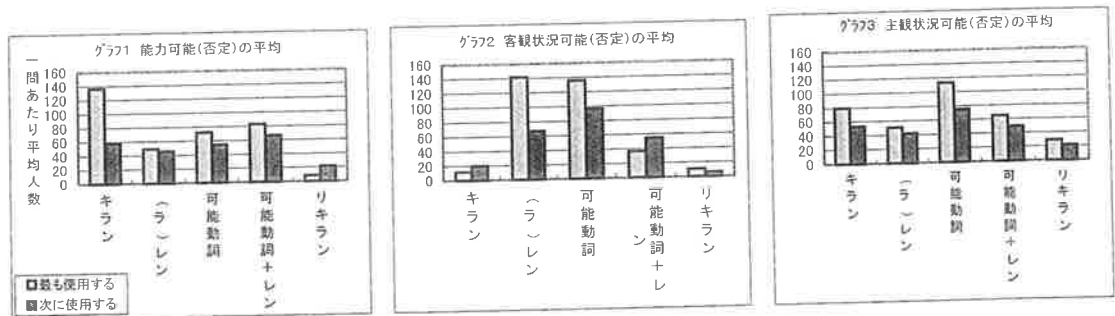
は分布が無く、「クエン」が271中11点在する。「タベレン」は1地点のみ。この地図の結果からは、大分県方言において主情性を強く表出するのは、現在能力可能の優勢形式である「キル（キラン）」と衰退傾向にあって県の東南部にわずかに残っている「ヨー（エー）＋動詞否定形」の形式、あるいは「可能動詞形」と考えられる。

次に、形式から意味を問う質問もしている。複数回答も目立つが、各形式の意味差は比較的是っきりと読み取れる。「食べラレン」は「くさっているとき」が多く、客観的状況可能の意味である。「食べキラン」と「ヨー食べベン」は一緒に質問されているので分けられないが、「嫌いなとき」が最も多く、「満腹なとき」も多い。さて、問題の「食べレン」は圧倒的に「満腹なとき」が多く、他に「嫌いなとき」「体調が悪いとき」「食欲がないとき」が散見される。これらは、動作主体内部の「一時的な」条件ということでもまとめられそうである。「嫌いなとき」については疑問が残るが、今は追及する材料が無い。したがってこの調査結果からは、主観状況可能の形式とされる「可能動詞＋レル」は、動作主体内部の一時的な状態（条件）で「できる・できない」を表明すると予想される。しかし、先の渋谷の調査結果、「行ケレン」の場合は「今は（めんどうだから）したくない」という話者の報告があり（前述）、ここで一概に神部説を退けることはできないのである。次に、話者が行ったアンケート結果の概略を示し、この問題をさらに追求してみることにする。

（3）大分県大分郡挾間中学校での可能表現

筆者が平成11年秋に行った、大分県大分郡挾間中学校生徒全員へのアンケート調査にも、可能表現の質問項目を9問入れた。3つの動詞「読む」「着る」「見る」それぞれに3種の可能表現「能力可能」「客観状況可能（外的条件可能）」「主観状況可能（内的条件可能）」が出現すると思われる質問文を作り、どのような形式を使うのかを選択式で回答してもらった。選択肢は5～6用意し、複数回答の場合は優先順位を書き入れてもらうことにした。

対象者は、1984～1987生まれの男女で、これまで大分県内から離れて住んだことのない334人（うち男性166人、女性168人）である¹⁵⁾。それぞれの可能表現に使われた形式を合計して表した総合図になっている（グラフ1～3）。



質問文の妥当性やいわゆる五（四）段活用動詞と一段動詞の違いなどについても検討の余

¹⁵⁾ 対象者の中には、県内で転居歴のある者が含まれている。

地があるが、ここでは形式の頻度のみに注目し、調査についての詳しい説明・検討は別稿において行うことにする。

その結果、能力可能では「キル（キラン）」、客観状況可能では「(ラ)レン」と「可能動詞」、主観状況可能では「可能動詞」の形式が担っていることになりそうである。しかしながら、他に比べて主観状況可能の不安定さ（極めて高い回答数の形式が存在しない）は注目すべきである。そして、「可能動詞+レン」が主観状況可能よりも能力可能に多いことも、どのように解釈すべきか考える必要がある。

そこで、「主観状況可能」の回答のみを動詞別に見た。（グラフ4～6）



グラフ5については、「似合わないと思うので着ることができない」という質問文から、本人の性格・志向（似合わない＝好みではない）を感じ、「キラン」の方を選んだと解釈できる。しかし、グラフ4「3時間も本を読んでいるので（もう）読むことができない」とグラフ6「朝からずっとテレビを見ているので（もうこれ以上は）見ることができない」は極めて近い条件を設定している。また、これらの質問文から強い主情性はまず読み取れないであろう。そうしてみると主観状況可能の形式としてなんとか「可能動詞+レン」が取り出せるのは、五（四）段動詞「読む」のみであり、一段動詞の「着る」と「見る」からはほとんど取り出せないと考えられる。また、この意味には「キラン」が進出しているかのように見える。

今回のアンケート結果からわかることをまとめると、以下のようになる。

1. 全体的に可能動詞の進出があること。可能動詞が、もともと全体に及ぶ古い形式ではないことから、新しく進出した形式だと判断できる。
2. 客観状況可能において、特に可能動詞の進出が目立つ（全回答の3分1強を占める）。
3. 能力可能では、「キラン」の回答が一番多く、比較的安定している。
4. 主観状況可能は、活用形によって使用度が異なるのではないかと予想される。なぜならば、「読む」では「ヨメレン」35%に対して、「着る」の「キレン」9%、「見る」の「ミレン」13%は低すぎるからである。

4の主観状況可能については、今回のアンケートだけでは明らかにするところとはできないが、一段動詞の場合は「可能動詞+レン」は衰退し、「キラン」が補って（進出して）いるようにも見える。「～レン」という音の連なりを嫌い、優勢の「キラン」を多用してい

るのかもしれない。この結果からも、可能表現の意味の下位区分構造において、「能力」と「主観状況」の関係を、「客観状況」と「主観状況」よりは近いと考えなければならないであろう。

(4) 新たな仮説へ

さて、ここで可能表現の意味区分についてあらためて考えてみたい。なぜ区分が行われるか、区分自体の持つ意味である。可能表現自体は、「動作主体が ある動作を 成し得る (完遂する)」ことであり、1形式 (あるいは相補分布関係の数形式) であればそれがそのまま形式の意味になる。ところが、渋谷(1993)の「自発形式の可能表現化」のように、その形式の中に、「それが なぜ できる/できない のか」という条件を内包するようになったと考えることができる。すなわち、中古には「(ラ) レル」などの形式が進出して動作主体外部の条件による可能表現を担ったのである。自発系の形式が及ばなかった部分は、「動作主体内部の条件による」可能表現を担当し、「完遂系」の形式(ウ、エル、ヨー、キルなど)によって担われた。それらは、動作主体の内部という条件上、主体の感情や判断と密接に結び付き、その結果「主情性が高い=強調のニュアンスを伴う」という特色を持った。この2極の意味区分は根強いものではあったが、音変化や周辺言語からの新形式としての参入などを繰り返すうちに、再び1形式化している地域も出てきた。このような流れの中での3区分化とはどういう現象なのかを考えてみなければならない。

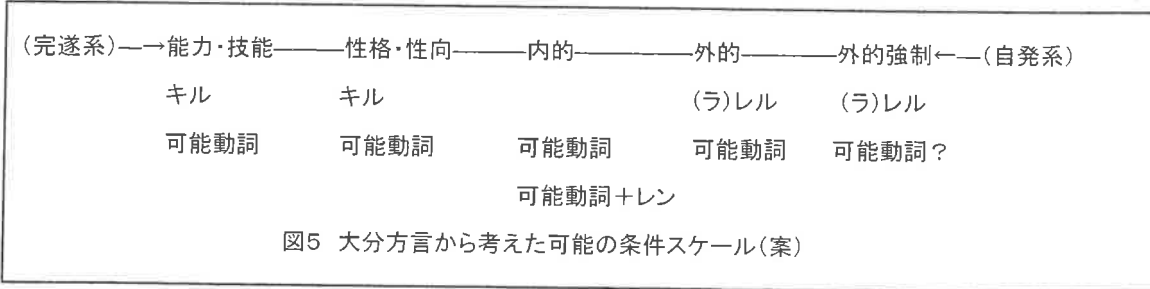
さて、実際の言語生活の場を想定してみると、可能表現を使用する場合に最も多用されるのが、何かを断る(しない)ときの「断り」を表明する場面ではないだろうか。渋谷(1993:235)にもまとめられている通り、そもそも可能表現においては肯否が非対称的で、否定形が使用されることが圧倒的に多いのである。そこで、「断り」を表現する際に理由は必要であり、意味区分が少なからず役に立つわけである。2区分であれば、先行研究などからも「動作主体内部の条件」と「動作主体外部の条件」にだいたい分かれることが明らかにされてきた。ならば大分県下の3区分によると、どうであろうか。

これまでの結果から言えば、上記2つに「動作主体内部とも外部ともつかない、その中間の条件」を加えたものであろう。例えば、先に報告された「満腹だから」が条件の典型と言えるだろう。動作主体はその時「満腹である」だけで、恒常的に満腹状態なのではない。したがって、確かに動作主体の内部ではありながら、他の動作主体内部の条件が持ちうる「恒常的」要素を持たない。しかし、動作主体の外部とも言えない。よって、どちらとも言えない「一時的な内部の条件」という条件があり、大分県方言ではこれを切り離れた(分節した)と考えられる。しかし、それだけであれば全国に3区分化が報告されてもよいはずである。ここに大分県方言の事情を加味する必要があると思われる。

以下に、筆者が渋谷勝己(1993:32)からヒントを得て考えた、大分方言における可能の条件スケール案を示す。(図5)

渋谷(1993:32)のスケールと大きく異なる点は、性格・性向条件の位置と名称である(図

4参照)。心情を省いて性向を入れたのは、心情や主情性は二次的な要素と考えたためである。上の条件スケールの規準は、左端を「動作主体の力や判断が及ぶところ」の極とするのは渋谷説と同じだが、最も及ぶところは「能力・技能」とするところが異なる。実は動作主体が動作を成し遂げる上で一番頼りになるのは、自身の技や能力であって、性格や性



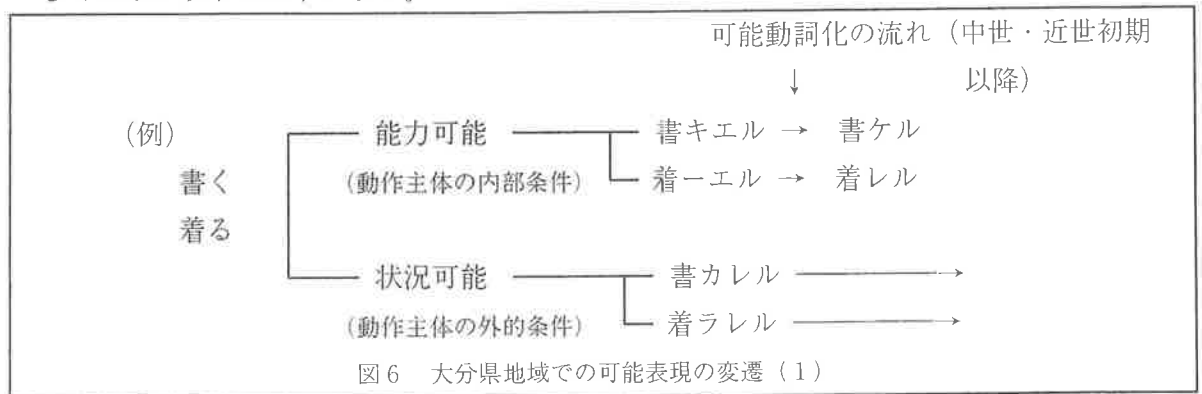
向ではない。また、内的条件にあたる一時的な気分や体調などは、自己の内部現象でありながら自分でもコントロールしにくい部分である。ある動作を「できる／できない」条件として考えるならば、「頼りになる = 制御可能」という順番で並べるのが適当だと思われる。このスケールにはそれぞれの形式も書き入れた。この図によって、可能表現の意味枠が左右からの語形の進出を受けて、中央に押し込まれるように変遷をする過程も説明できる。

大分県の場合、スケールの左側から「キル」が迫って、それまで能力可能を担っていた「可能動詞」「可能動詞+レン」を押し出したのであろう。すると押された形式は、まず左端の能力・技能条件の意味から失ってゆくと考えると理解しやすい。両形は可能動詞とその変形であり、可能動詞を多用する共通語の支援を受けたこともあって、衰えることなく、話者たちもその語形を止めるために何らかの意味を与えようとした。そしてスケール中央にある、動作主体内部でありながら外的条件に最も近い内的条件を分節したのだと考えられる。しかし、共通語の支援を受け続けたのは「可能動詞」だけで、「可能動詞+レン」は次第に局所的な表現となり、神部説の通り固定化していったものと思われる。一方、「可能動詞」の方はその後も躍進し、スケールの右側まで進出中と思われる。状況可能には有力なライバルが存在しないため、今や「(ラ)レル」と並ぶまでになったことが、挟間中学生徒のアンケート結果には表れているのである。

形式面からも、大分県下での変遷を考える必要がある。先述したように、佐賀県・長崎県に1段階古いと考えられる組み合わせ「エル：能力可能」「(ラ)レル：外的条件可能」があり、大分県でも現在の「キル：能力可能」の前は「エル：能力可能」だったと考えてよい。このことは先行研究でも論じられており、両者矛盾するところはない。

可能表現のうち外的状況可能の形式はこれまで見たところ非常に安定しており、先行研究にもある通り「(ラ)レル：外的条件可能」の時代が長く続いてきたと考えられる。渋谷(1993:135, 185)によれば、可能動詞の発生には諸説あるようだが、ここではその吟味はしない。全国的な流行の影響を受けて、中世～近世初期ころから可能動詞形が大分にもたらされたのは確かであろう。

もともと可能動詞形にするには、例えば「書キエル→書ケル」、つまり「kakieru → kakeru (簡略音声記号)」という、連母音の融合（さらにエーをエに短母音化）現象なので、言語変化の原則に沿った、簡単な変化である。おそらく短期間のうちにこの変化は完了したと思われる。ただし、一（二）段活用の場合、例えば「着（一）エル」という形から「着レル（ルル）」になるにはそう簡単にはいかない。詳しい説明は省くが、筆者は渋谷（1993：190）の「過剰般化（over-generalization）」¹⁶⁾を適応すべきだと考える。つまり、「書ケル：能力可能」となった後に「着（一）エル」は、「エル」という語形の支え（読ミエルとパラレルであったことが支え）を失い、新たに「読メル」とパラレルな関係を求めるのが自然である。そこで、同じ法則では「着エル」というあまり変化の無い形しか得られないため、おそらくは外的条件可能形式の「着ラレル」から「ラ」を取った「着レル」が採用されたものと思われる。この生成法はB型可能動詞の生成そのものであり、筆者も先行研究と同じ「類推」が働いた結果ととらえる。この説明には、今後さらに検証を加える必要があるが、ここでは話を進めて、この「着レル」形式が成立した頃の可能表現を図式化してみると以下のようなになる。

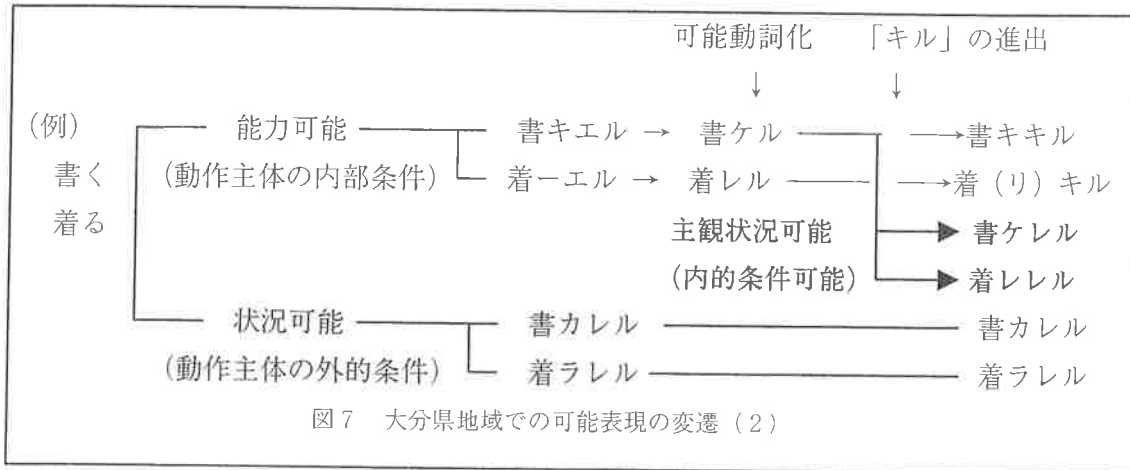


これで一度は安定した可能表現体系に、先述した九州北部から「～キル」が進出してきたため、能力可能の場所を明け渡すことになった可能動詞形は、次なる居場所を探すことになる。そこで得た場所が、「動作主体の内部とも外部とも言えない中間:主観状況可能(内的条件可能)」であったのではないだろうか。しかし、可能動詞形式が担っていた範疇はあくまでも動作主体の内部にとどまり、その中を分節しようとしているにすぎない。この分節現象は現在も過渡的状态であることが、先行研究やアンケートの結果の揺れから見出せる。さて、書ケレル、着レレルになった時期についてだが、可能動詞形の3音節から状況可能と同じ4音節に揃えようとする動きが発生時からあり、段階的になっていったものと思われる。それは「キル」の進出によって、より強化されたことが予想される。そこで次に現在までの可能表現の変遷図を示す。(図7)

¹⁶⁾ 渋谷(1993:233)で、可能動詞の生成過程の仮説から行った一般化は以下の通り。

「ある歴史的な流れを生み出したり、その流れによって新たな形式を生み出したりすることは中央部で起こることが多い。しかしその流れを、時に中央部で起こった変化の度合いをはるかに越えて一般化させるのは、規範意識から解放されている周辺部の人々である。」

図7のように、4音節で揃える力は、「キル」形式の登場によってなお一層強化されたとと思われる。しかしながら、ごく最近行ったアンケート結果からは、可能表現形式全体的に可能動詞の進入があり、特に一段動詞における「可能動詞+レル」は衰退傾向がはっきりと表れている。これと同時に、築かれつつあった3区分にかなりのダメージを与えていると予想される。



V. まとめと課題

以上、これまでの大分県の可能表現研究を振り返り、九州地方や全国の先行研究と照らし合わせて問題点を抽出した。また、挾間町中学校生徒のアンケート調査によって最近の傾向を知り、大分県方言の可能表現の変遷や意味構造について、新しい仮説を提示した。

問題は、大分県における「可能動詞+レル/レン」の形式、渋谷説によるところの内的可能条件の存在である。この形式によって、「一時的な動作主体内部の条件によるできる/できない」という意味が表されるのはなぜか、また大分県だけで報告されるのはどうしてかを追究した。

たとえば、先述した「行ケレン」は、「今疲れている」という不可能の条件とともに「めんどくさい」のニュアンスを持ち、第三者には用いることが出来ないという内省がある。旧能力可能形式がなぜ主情性を強く帯びるかについては、今は十分な資料を持っていないが、神部(1992)の「局限的な表現特性を持つ」ことについてさらに考えてみたい。「動作主体=発話者に限る」という制約が働き、一時的な内面の状態ゆえに訴える要素が付加される=主情性を帯びるということなのかもしれない。

また、挾間中学でのアンケート結果からは、分節したはずの「主観状況可能(内的条件可能)」は、どうやらまた「能力可能」の形式に再吸収されそうな動き見られる。しかし、同時に可能動詞の進入もあって、目の離せない状態である。今後の課題として、大分県下全域での「可能動詞+レン」の分布を知ること、可能の内的条件が文節しているかどうかを引き続き調査・検証すること、可能の条件スケール(案)の再検討などが考えられる。

大分県の可能表現3区分とは、流行に弱い一方で、体系性にこだわる一途さが生み出した、大分県という地域特性を浮かび上がらせる一つの現象ではないだろうか。